

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

継続して活動する（探求の深まり）／出雲市立鳶巣幼稚園

「発見」「なぜ？」がキーワードになる探求の姿。乳幼児であっても「知りたい」という知識欲や「そうだったんだ」と納得したい気持ちがあり、自ら飽きることなく興味の対象に関わります。今回は、竹との関わりを深めている実践を紹介いたします。



○ 鳶巣の自然環境を活かして／3・4・5歳児

✦ 地域の“たけのこ山”の環境を活かして（3年間継続してたけのこ山で活動を重ねている）

実践1 小学生との交流

例年、小学校3年生と一緒に、筍掘りや筍ご飯のおにぎりを食べる体験をしている。竹を使ったオモチャでの遊びなど、竹を取り入れた活動での交流も重ねている。

実践2 保護者や地域の方（竹工房さん）との交流、関わりを重ねる

保護者と竹を使った遊具などを作る。実際に運動会や川遊びで使い、ダイナミックな活動を楽しむ。また、地域の専門家の方に、竹の掘り方や扱い方、疑問など、適時教えていただき、関わりを重ねている。

実践3 探求の深まり 1. 様々な感覚感性を発揮して、竹と関わる[4月]

- 筍を見付けて掘り出す。
- 自分の背丈ほどある筍を押ししたり引っ張ったりして倒そうとする。
- 竹に耳を当てて音を楽しむ。
- 竹の数が増えることに気付く。
- 筍の皮をむいたり切った断面を見たりする。
- 竹工房さんが掘った筍を見て、根っこが繋がっていることを知る。



考察

たけのこ山という自然の中でのたくさんの筍や竹との出会いが、子どもたちの心を揺さぶった。このことが、“触れる”“匂う”“観察する”“耳を澄ませる”“味わう”といった五感を働かせる姿につながっていった。これは自らが「～してみたい」という意欲・思い・願いをもち、主体的に関わっていった姿である。

2. 竹への関わりや興味を深める[5月]

- たけのこ山の斜面遊びで根を掴み、竹の根に気付いて興味をもつ。
- 3歳児が生えている筍の皮をむく。皮がむける音、むいた所や皮の色に興味をもち見る。気付いたことを言ったり伝えたりする。

子どものことば

「皮をむくとパリパリした」「皮むいたら白に変わった」「皮をむいてみたら、白いやつと緑のやつが出てきた。筍が竹になってきとるんだ」「皮をむいたらまだまだ茶色がでてきたら、まだ皮があるんだ」「いっぱい（皮を）着ると寒くないもん」「一番上のとげ（皮の先についている葉っぱ）が3枚あると、筍の皮も3枚だよ」

- 数日後、皮をむいた筍とむいていない筍の違いに気付く。
皮をむいた筍を触るとブチャブチャ柔らかい。黒くなっている。コバエが来ている。皮をむいた3本のうち2本は腐っている。
1本は曲がりながらも上に伸びて竹になった。
皮をむくと寒いので、竹のように大きくなれないと思ったようだ。



考察

筍の腐れの観察では、3歳児が皮をむいたことをきっかけとして、5歳児の経過観察が始まった。保育者が安易に教えたり、先走ったりせず、子どものつぶやきや小さな発見を価値付けたことで、活動が継続していった。これらのことは、子どもたちの「なんでかな?」「どうなるのかな?」といった不思議に思う気持ちや探究心を高めていく要因となった。

3.根っこに興味をもち、不思議さを感じ探求する[6月]

- 崖遊びをし、竹の根っこがたくさんあることに気付く。
- 以前、竹工房さんが根っこを掘って見せてくれたように、移植ごてで掘る。硬くてなかなか掘れないが、友達と協力してどこまでつながっているか確かめようとして掘る。
- 根っこへの興味が深まり、根っこを切って持ち帰り観察する。
「うわ!穴がない!」「本当だ!穴がないよ!」「竹は穴があるけど、根っこは穴がないんだ!」「竹の秘密見付けたね!」「何で穴がないのかなあ?」
- 科学館に行き、自分たちのもった不思議や疑問を教えてもらう。



考察

筍と竹の違いや、竹の生きる力の過程、竹の色の変化、そして地上だけでなく地面の下の茎（地下茎）にも興味をもち、竹と地下茎との関連や違いなどに気付くことができた。このことは、不思議さを感じ疑問をもって意欲的に行動し、探求が深まった現れである。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」